

農家住宅納屋を改修した児童クラブハウス「つばめの家」の 夏休み期間中の使われ方

SPACE UTILIZATION OF AFTER-SCHOOL DAY CARE CENTER "SWALLOW HOUSE" CONVERTED FROM FARMER'S BARN IN SUMMER VACATION

中園 真人*, 後谷 一機**, 山本 幸子***, 牛島 朗****

*Mahito NAKAZONO, Ichiki USHIRODANI, Sachiko YAMAMOTO
and Akira USHIJIMA*

This paper clears the characteristics of space utilization of after-school day care center converted from a farmer's barn and the outline of special program by volunteer instructors in the region and aims to explain the effect that give to the all day life of children. The program is held with various themes, and it is effective as the experience program to change into ordinary play though it only takes about one hour in the morning. The continuance time of static play in the afternoon on the program making day is especially long, and the movement and repetition of same play number of times decrease so the effect of the program is recognized.

Keywords : *After-School Day Care Center, Farmer's Barn, Conversion, Regional Special Program, Summer Vacation, Space Utilization*

学童保育施設, 納屋, 改修, 地域塾, 夏休み, 使われ方

1. 序論

1997年制定の児童福祉法により放課後学童保育が制度化され、学童保育施設の整備が進められているが、待機児童数は約1万人といわれ、都市地域における施設不足の解消と適正規模とされる収容児童数40人以下の施設整備の促進、農村地域における未整備校区での施設設置が課題といえる。児童数減少に伴う余裕教室の利用は、既存施設の有効活用と管理運営の観点から今後も増加するものと推測されるが、これに加え民間を含めた小学校以外の既存施設の活用や民間組織による地域に密着した運営の促進が重要と考えられる。また学童保育は保護者が就労する家庭の児童が基本となるため、平日の放課後のみでなく休校日も保育が行なわれる施設が多く、児童の1日の生活の場として位置付け、終日保育を円滑に遂行できる運営体制、平日放課後よりも充実した生活プログラムの準備や、遊びに加え多様な学習の場としても機能する施設の空間構成が求められる。

既往研究には学童保育施設を含む児童の居場所確保の重要性を指摘した研究¹⁾を始め、使われ方調査をもとに保育施設の空間構成のあり方を論じた研究成果^{2,3)}があり、2室3領域型のモデルプランも提案されている。最近では保育空間の分割方法と効果を検討した研究⁴⁾や学童保育と放課後子供教室の一体的運用のあり方を論じた研究⁵⁾等、今日的課題への展開が見られる。一方民間施設を活用した学童保育に関しては、民家型施設の平面構成を整理した報告⁶⁾、マンション設置型保育所・学童クラブの整備状況報告⁷⁾等があるが、全体的には研究蓄積は少ない。また既往研究では平日の放課後を対象とした調査が大半で、児童の保育時間が終日となる土曜日や長期休校期間中の運営体制・生活プログラム・使われ方に関しては、夏休

み期間中の児童の生活実態や空間の使われ方の特徴を明らかにし、終日保育の課題を論じた最近の研究成果^{8,9)}はあるが、その他の報告例¹⁰⁾は少なく、特に終日保育が長期にわたる夏休み期間中の施設利用・運営形態の把握と、終日保育における空間機能評価及び空間構成のあり方の検討が課題として位置付けられる。

関連して筆者らは、民間施設活用型の施設整備の一環として、農家住宅納屋を放課後学童保育施設に改修整備するプロジェクトに参加し改修設計を担当した。既報¹²⁾では施設設置に向けた経緯、耐震補強を伴う改修設計・施工プロセス及びコスト分析を通して、学童保育施設への再生が実現した条件を整理し、児童の保護者や地域ボランティアの施設建設への参加を契機とした、学童保育施設の運営への関与を促す効果も期待されると考察した。本施設は改修後格的運用が開始されたが、特に夏休み期間中には地域ボランティアによる地域塾(以下、塾と略称)が児童を対象に20日以上開催されており、終日保育における先進的取組みとして注目される。

そこで本論では、夏休み期間中の塾の全体像を整理した上で、1日の使われ方の特徴及び学童保育施設としての有効性を検討するとともに、塾の取組みが児童の施設での生活に与える影響を明らかにすることを目的とし、その知見をもとに、終日学童保育における生活プログラムと施設空間構成のあり方に関し考察を加える。

2. 対象施設と調査概要

下関市菊川町の主要施設と小学校、「つばめの家」が設置されている地域共生ホーム「中村さん家」の位置を図1に示す。「中村さん家」は2004年9月に開設された伝統的農家住宅を改修した高齢者通所介

* 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

** 山口大学大学院理工学研究科 博士前期課程

*** 筑波大学システム情報系 助教・博士(工学)

**** 山口大学大学院理工学研究科 助教・博士(工学)

Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

Assistant Prof., Faculty of Eng., Info. and Systems, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

Assistant Prof., Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.



図1 施設位置図

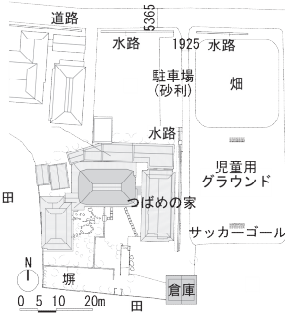


図2 施設配置図

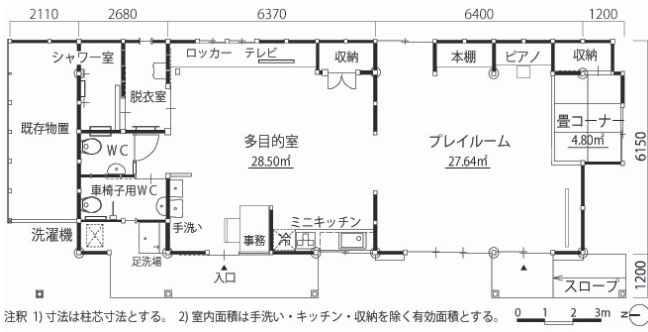


図3 「つばめの家」平面図



写真1 外観



写真2 多目的室



写真3 プレイルーム

護施設で、同年に宿泊・児童の放課後預かりサービス、幼児預かりサービスも開始され、2006-2009年の放課後保育登録児童数は10-15名程度であった^{注1)}。町営の学童保育施設は全町児童を対象とした「菊川町児童クラブ」のみであったため、最も児童数の多い豊東小学校に通学する児童保護者により放課後保育施設設置運動が行われ、小学校や周辺の空き家利用が検討されたが実現せず、児童の放課後預かり実績を有する「中村さん家」に設置されることとなり、以前から学童保育に利用されていた納屋(写真1)を全面改修し2010年4月に開設された。既存の納屋2室と家畜小屋を多目的室・プレイルーム・畳コーナー及びトイレ・シャワー室としたコンパクトな2室3領域の空間構成であり(図3, 写真2, 3)、手洗い・キッチン・収納を除いた有効面積は60.9㎡(多目的室:28.5㎡、プレイルーム:27.6㎡、畳コーナー:4.8㎡)で、児童定員は25人(2.4㎡/人)である。

調査は利用登録児童の属性(年齢・性別・住所)及び塾講師の属性に関する資料収集、家具配置及び施設の使われ方調査を実施した。使われ方の調査期間は夏休み(2011.7.21-2011.8.31)の42日間、施設の閉所日(日曜日5日間、盆休み:8.13-8.16の4日間及び児童登校日:8.20の計10日間)を除く全開所日32日間である。地域ボランティアを含め児童・職員全員を対象とし、施設の開錠から施錠まで(7:45頃-18:00頃)の終日、10分間隔で行為の場と内容を平面図に記録し併せて随時会話の記録を行なった。多目的室とプレイルームにはビデオカメラを各1台設置し、1日の生活場面を全期間撮影するとともに、適宜写真撮影を行い記録した。

表1 夏休み期間中の生活プログラムの基本構成

	午前	午後	日数
平日	地域塾	プール	8
	地域塾	自由遊び	13
	野外塾	野外塾	2
	自由遊び	プール	1
	自由遊び	自由遊び	4
土曜日	自由遊び	自由遊び	4
計			32

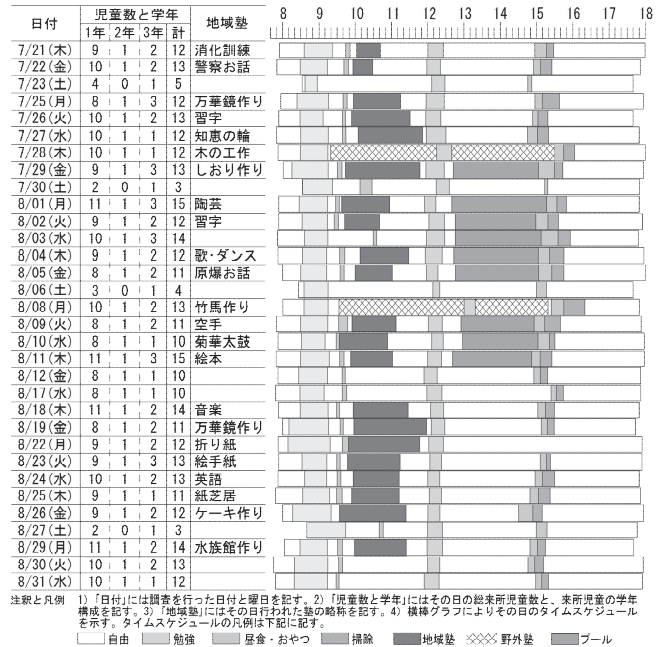


図4 夏休み期間中の1日の生活プログラム

3. 夏休み期間中の生活プログラム

3.1 夏休み期間中の生活プログラムの基本構成

自由遊び・塾・水泳(プール)を1日の主な活動と位置付けると、夏休み期間中の生活プログラムの基本構成は表1に示す6タイプに分かれる。開所日32日間の内塾が23日間(2/3)開催されているため、午前・午後のプログラムの組み合わせは「地域塾・自由遊び」が13日間と最も多く、次いで「地域塾・プール」の8日間の順で、さらに野外塾が2日開催されている。午後水泳に出かけるのは小学校のプールが開放される期間(7.29-8.11)の内9日間と比較的少ない。一方、特別なプログラムが組まれず午前・午後とも自由遊びの日は、土曜日(4日間)を含め8日間のみである。但し、土曜日は来所児童数が少なく開所時間も平日より30分程度遅いため、平日の「自由遊び・自由遊び」と同一タイプとして扱うには条件が異なり区別して分類する。

3.2 1日の生活プログラム

夏休み期間中の1日の生活プログラムを図4に示す。主なプログラムは自由遊び・塾・プールと勉強・昼食・おやつ・掃除である。

(1) 午前のプログラム

児童は朝8:00前後から8:30頃迄に保護者の車で来所し、早く来た児童は自由に遊びながら過ごす。勉強は多目的室に長机を配置し、全員がほぼ揃う8:30-9:15の45分間を目安に行われる。その後午前のおよつの時間が9:30頃に設けられる。塾は午前10:00-11:00前後の1時間程度(場合によっては10:00-12:00前頃までの2時間弱)を目安に、講師が指導し工作やゲーム又は勉強等を全員で行う。室内の場合は全てプレイルームが利用され、必要に応じ事前に長机

表 2 地域塾の内容と講師

系(回数)	お話し系(4)	工作系(8)		勉強系(3)	音楽系(3)	運動系(2)	野外塾(2)
タイトル	おまわりさんお話	万華鏡作り(1)	折り紙工作	消火訓練	菊華太鼓	人間知恵の輪	竹の工作
日付/時間	07.21/10:00～10:30	07.25/10:00～11:10	08.22/10:00～11:50	07.21/10:00～10:50	08.10/10:00～11:00	07.27/10:00～11:50	07.28/10:00～15:00
内容	夏休みの安全な過ごし方・交通安全	画用紙・マジックで万華鏡作り	画用紙・折り紙で工作	消火訓練 消防車・救急車を見学	太鼓教室	手を繋いでグループになる人間知恵の輪	竹を用いた下駄作り 午後は川遊び
講師所属	長府警察署	地域で芸術教室開講	元小学校教諭	菊川消防署	太鼓教室開講	元数学教諭	歌野の自然とふれあう会
タイトル	原爆のお話し	万華鏡作り(2)	絵手紙作り	習字	歌とダンス	空手	竹馬作り
日付/時間	08.05/10:00～11:10	08.19/10:00～11:50	08.23/10:00～11:10	08.02/10:00～11:00	08.04/10:00～11:20	08.09/10:00～11:10	08.08/10:00～15:00
内容	原爆の紙芝居・絵本	指の体操・紙と色折り紙で万華鏡作り	絵の具で花の写生 装飾で絵手紙	学校に提出する習字	講師のギター演奏 歌・踊り	空手教室	竹馬作り 午後は川遊び
講師所属	元小学校教諭	元小学校教諭	食物推進委員会所属	習字教室開講	NPO 活動家	地域で空手教室開講	歌野の自然とふれあう会
タイトル	絵本の読み聞かせ	国体用しおり作り	誕生会ケーキ作り	英語に親しむ	音楽に親しむ	注釈 1) 系(回数) … 活動タイプ毎の分類項目 ① 内の数字は、系に当てはまる地域塾の数	
日付/時間	08.11/10:00～11:10	07.29/09:50～11:40	08.26/10:00～11:20	08.24/10:00～11:20	08.18/10:00～11:30		
内容	世間話・ミニゲーム・絵本の読み聞かせ	色紙でしおり作り	誕生会ケーキを作りおやつに食べる	英語の挨拶・簡単な歌 踊り・ミニゲーム	講師によるギター・笛の演奏・歌		
講師所属	地域ボランティア活動	押し花教室開講	食物推進委員会所属	英語教室開講	元音楽教諭		
タイトル	校長先生による紙芝居	陶芸	ボトル水族館作り	2) タイトル … 地域塾のタイトル。スタッフにより決められ、予定表に記載される 3) 日付/時間 … 地域塾が行われた日付・時刻を示す 4) 内容 … 児童が行った活動概要 5) 講師所属 … 招かれた講師の所属団体を示す			
日付/時間	08.25/10:00～11:30	08.01/10:00～11:00	08.29/10:00～11:20				
内容	紙芝居	粘土を使った陶芸教室	ペットボトル・ビー玉等で水族館作り				
講師所属	元大学教員	陶芸教室開講	山口大学工学部				

等の家具が準備される。塾終了後は昼食の時間まで自由時間となる。塾が開催されない日はこの時間帯は自由時間で、昼食の時間まで室内遊びや室外へ出て虫取りをする等自由に遊ぶ。昼食は多目的室に長机を配置し、12:00～12:20分前後の間にとられる。食事開始の挨拶から終了挨拶の間は、早く食事が済んだ児童も途中で席を外し遊ぶことは制限されている。

(2) 午後のプログラム

児童の通う豊東小学校のプールが夏休み中の一定期間開放されるため、生活プログラムに取込まれており、プールの日は昼食後着替えを済ませた後 12:30～13:00 頃マイクロバスで施設を出発し、15:00 前後のおやつ時間に合わせ施設に戻る。プールがない日は自由遊びである。おやつは午前同様多目的室に準備される。おやつの後多目的室・プレイルーム・室外に分かれ職員の指示に従い掃除が行なわれる。その後は自由時間となり児童は保護者が迎えにくる迄室内外で遊ぶが、デイサービスや保護者の送迎車両の出入りがあるため、安全性を考慮し 17:00 以降の外遊びは制限されている。

4. 地域塾

4.1 地域の人材と連携した夏休み地域塾の取組み

「中村さん家」では 2004 年から学童保育が開始され、2005 年の夏休みからは、施設に通う児童と地域住民の交流を図る活動として、地域ボランティアが講師を務める塾が初めて試行され、体験学習や遊びが行われた。その後も夏休みの塾は毎年継続されており、夏休み期間中のみの児童の受入れも行なわれている。

調査期間中の塾の内容と講師一覧を表 2 に示す。塾の内容は、時事の話や絵本を読み聞かせる「お話し系」、習字や英語等が行われる「勉強系」、講師が準備した課題作品を作る「工作系」、講師の演奏・指導で歌や踊り・楽器演奏を行う「音楽系」、身体運動やミニゲームを行う「運動系」、施設を離れ自然体験学習を行う「野外塾」の 6 系に分類される^{注2)}。講師には元学校教員が 6 名参加し、お話・工作・音楽・運動系の塾が開催され、また地域で教室を主宰する講師 6 名と NPO・ボランティア活動を行なう講師が 2 名参加し、工作・勉強・音楽・運動系の塾が開催されている。他にも町委員会委員、消防・警察署員、大学生が講師として参加し、多彩なメンバーで塾が運営されている。

このように、地域活動のリーダーや元学校教員らが地域ボランテ

ィアとして施設運営に協力している背景には、運営主体が下関市社会福祉協議会のため、地域の様々な活動団体・組織との日常的交流が頻繁で、改修時に地域ボランティアの協力を得たこと等、社協が運営する地域児童の福祉施設のため、地域との密接な連携・協力関係が存在する点が大きく、社協を始めとする地域に密着した民間組織による学童保育施設運営として位置付けられる。

4.2 地域塾でのプレイルーム・畳コーナーの使われ方

地域塾は全てプレイルームで行われるが、内容はお話系から運動系まで多様なため、各系の典型事例を取上げ使われ方の特徴と室面積との関係を検討する。塾の各系の使われ方の場面例を図 5 に示す。

お話系の「絵本の読み聞かせ」では 4 列・3 列の並行机配置が行われ、1 卓に 2～3 名が座る。この形式が基本となり講師の話やミニゲーム・挨拶を行う。読み聞かせの時は絵本が見えるよう講師の近くに集まる(写真 a)。畳コーナーには講師の荷物が置かれ、読み聞かせ時には講師は畳コーナーに腰掛けて絵本を広げる。並行配置した机に各自着席する状態ではプレイルーム全体を使用している(図 a)、読み聞かせ時に講師の周りに集まる際には、児童の分布範囲は 1/3 程度になる(図 b)。

勉強系の「習字」では墨で床が汚れない様シートと新聞紙が敷かれる。机間巡視を行える様 4 列・3 列の並行机配置が行われ 1 卓に 2 名の児童が座る。南側には字の説明や作品を選んでもらうための空間、北側には作品を新聞紙上に並べるスペースが確保される。講師は畳コーナーに荷物を広げホワイトボードで説明を行う(図 c)。児童が練習を始めると講師・職員は机の間を巡回する。机の前後の間隔も広めに配置されているため 1 児童の作業領域は広く、机間巡視を行うのに十分なスペースも確保されている(図 d)。

工作系の「しおり作り」では、長机 2 卓を合わせた机を 3 卓配置し、1 卓に 4～5 名の児童が座り、手伝い合いながら作業する。北側には職員用机 1 卓が置かれ、講師・職員が机間巡視出来る幅を確保した机配置がなされている。作業の説明や見本を置く場所としてホワイトボードが使用される(図 e)。机位置を工夫しているため説明し易く、作業途中に見本を確認しにボード近くへ集まることも出来る。また材料を取りに行く、或は机間巡視のための通路幅も確保されている(図 f)。児童の分布範囲も全体の 2/3 程度で、お話・勉強系と同程度の人数の場合にも、机配列を変更し児童が向い合い共同で作業を行

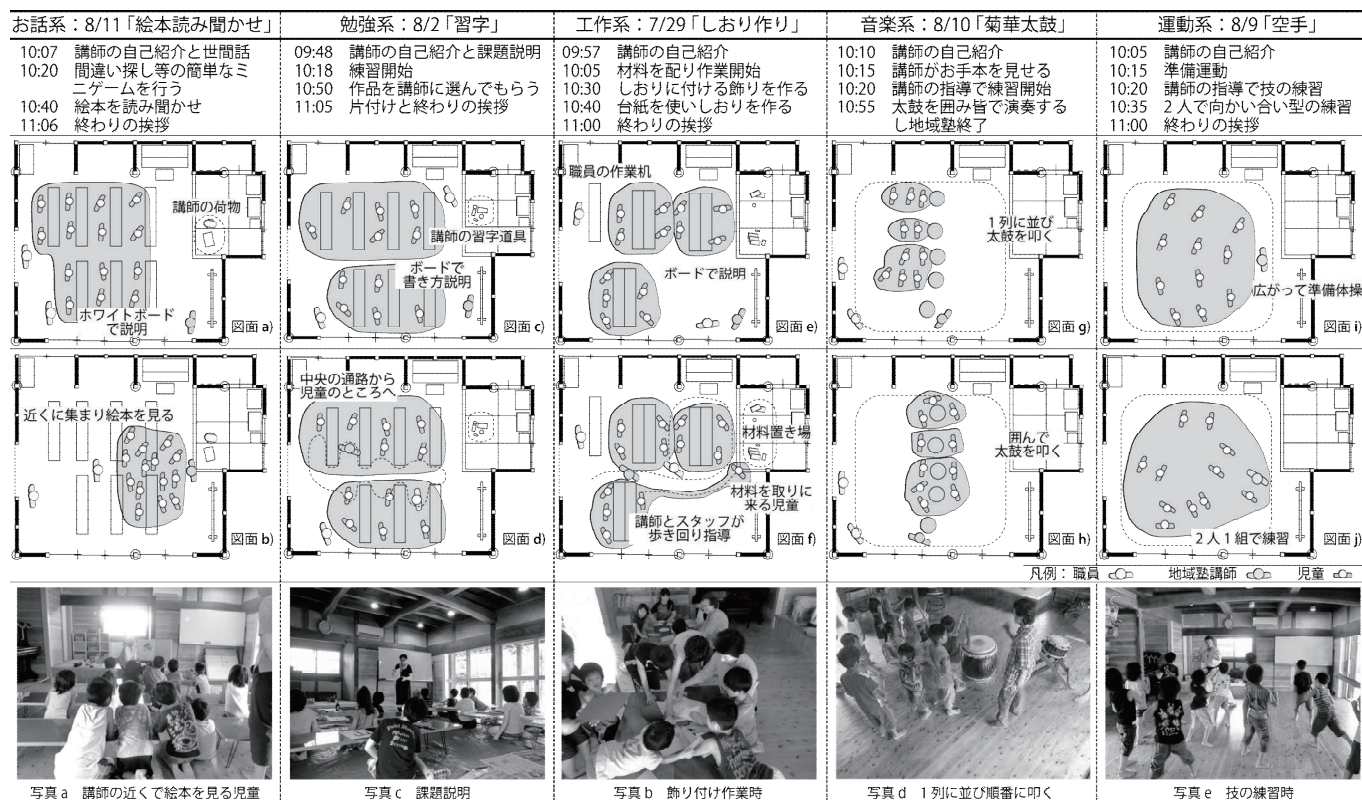


図5 地域塾の活動場面

えるスペースが確保されている。

音楽系の「菊華太鼓」では、西側全面引戸の開口部から大太鼓等の搬入が行われ、プログラムに合った大道具のスムーズな搬入・配置を可能としている。本格的な大太鼓が使用され室内に1列に並べられる。練習は大太鼓の前に1列に並び順番に叩く(図g)、太鼓を囲み一斉に叩く(図h)順序で行われるが、太鼓の間隔を広く配置しているため、隣接する児童同士が接触する事は無く、児童の分布範囲は大太鼓の周りに児童が集まるため終始1/3程度である。

運動系の「空手」では、最初に準備体操を行うため児童同士が接触しないよう間隔を空けて広がる(図i)。練習の際にはそのままの隊形で講師の動きに合わせて練習する、2人1組で向かい合う運動(図j)が行われる。運動の内容に合わせて児童の隊形が変わる場合も常に室全体が使われているが、充分に間隔を空け広がる事が出来ている。

以上の活動に見られる様に、プレイルームの有効面積27.6㎡に対し調査期間中の児童数は10-15名のため、地域塾ではプログラムに対応した家具や道具の配置の工夫により、静的なお話・勉強系から動的な運動系まで様々な活動が支障なく展開されている。長机を並行配置するため児童の室内分布範囲が最も広がる勉強系の場合にも、利用児童数が増加すれば、机配列と座席数の工夫(長机5列・3列並行配置、長机3人着座)により24名程度は収容可能と推測されるが、室内及び外部遊び庭での行動を含めた規模計画論の観点からの本施設の評価に関しては今後の課題としたい。

5. 1日の生活プログラムの展開と空間の使われ方

5.1 「地域塾・自由遊び」の使われ方

夏休み期間中の生活プログラム構成の中で最も日数の多い、「地域塾・自由遊び」の典型日(2011.7.22)を対象に、プレイルームと多目的

室の2室が連続する平面構成の有効性を、1日のプログラムの展開と空間の使われ方の分析を通して確認する(図6)。

児童は8:00-8:30頃来所する。職員は多目的室に机を配置し勉強の準備を行い、その後事務作業を行う。机は多目的室の収納から取出し配置するため、準備中に来所した児童はプレイルーム・畳コーナーでレゴ遊びを行う(A)。勉強時間(8:30-9:15)には机1卓に児童2人が床座し職員は机間巡視を行う。机は十分な幅を確保して配置される(B)。勉強を終えていない児童やおやつ準備のため、勉強後の遊びはプレイルームと畳コーナーに制限される。児童全員の勉強が終わると机の移動・おやつの準備を行う(C)。おやつは多目的室に全員で床座し食べる。全員が多目的室にいる間に職員は机配置等地域塾の準備を行う(D)。おやつ後も準備が完了するまで遊びは多目的室と畳コーナーに制限され、畳コーナーではレゴ遊びが行われる。準備が終るとプレイルームでも机の周囲で追いかけっこが行われる(E)。

塾では「おまわりさんのお話」が行われる。プレイルーム東西に3列ずつ机が配置され1卓に2-3名の児童が着席する。机は中央を職員が通れる幅が確保されている(F)。塾が終わると昼食までの間、多目的室ではビデオ・塗り絵、プレイルームでは追いかけっこ、畳コーナーではレゴ遊びが行われている。塾後の後片付けの間は多目的室と畳コーナーに遊びが制限され、片付け後はプレイルームでも遊びが行われる。机配置は変更せずお茶の準備を行い昼食となる(G)が、児童はロッカーから水筒・弁当を取出し、机を囲み床座で昼食を取る。児童人数が多い日には職員は事務机で昼食を取る(H)。

昼食後片付けを行いその後は2室で自由に遊ぶが、多目的室でのビデオ視聴とプレイルームでのごっこ遊びが連動する場面も見られた。机は置かれたままで、多目的室では塗り絵・お絵かきが行われる(I)。おやつ時には多目的室に集まり(J)、その後追いかけっこで

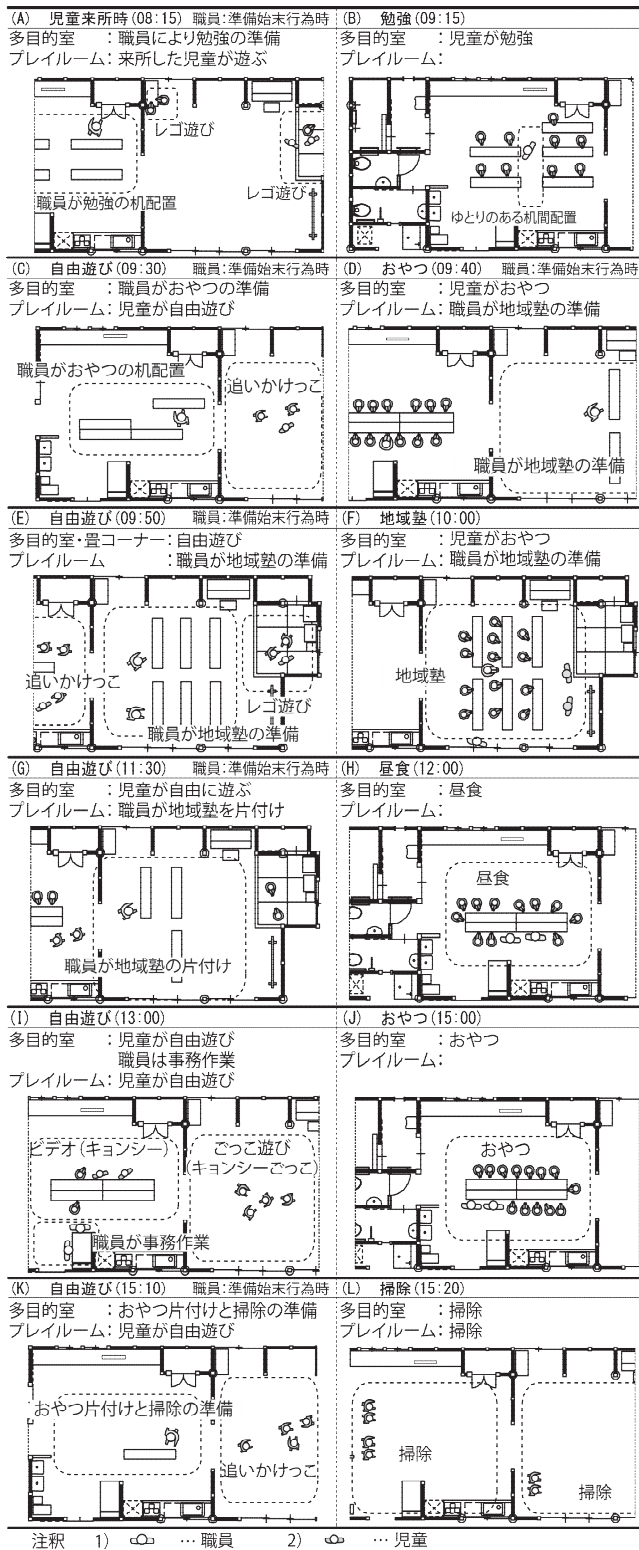
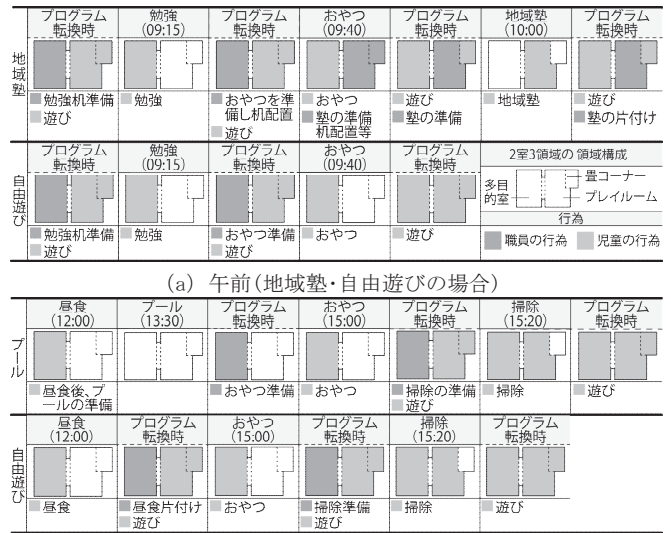


図6 「地域塾・自由遊び」の典型事例(2011.7.22)

遊ぶ。おやつ片付けと机の収納を行う間は多目的室での遊びは制限される(K)。掃除は室内・庭担当に分かれ、床の雑巾がけやトイレ掃除、庭の草取りを行う(L)。その後は保護者の迎えまでごっこ遊びやビデオを見て過ごす、動的遊びはプレイルームに制限される。

5.2 2室3領域型平面構成における場面転換の特徴

次に全日程の使われ方の分析結果をもとに、午前(塾・自由遊びの場合)及び午後(プール・自由遊びの場合)の多目的室とプレイルーム



(a) 午前(地域塾・自由遊びの場合)

(b) 午後(プール・自由遊びの場合)

図7 場面転換のモデル図

における児童の行為の場とプログラム転換時の職員の準備始末行為の関係を整理した。場面転換モデルを図7に示す。

職員は児童の来所前に多目的室に勉強用の机を配置する(a)。児童がすでに来所している場合遊びはプレイルーム・畳コーナーで行われるが、畳コーナーは床の段差があるため主にレゴ遊びの場として位置付けられており、レゴ部品がプレイルームに散乱し他の児童が転倒・怪我をしないよう配慮されている。勉強時には多目的室へ全員集まる。勉強後、おやつ準備を行う時はプレイルーム・畳コーナーが児童の遊び場となる。また児童のおやつ時に職員はプレイルームで机配列等の塾の準備を行い、職員の準備行為と児童の遊びの場が空間的に区分される。塾の片付け時には児童の遊びは多目的室と畳コーナーで行われる。午前中は勉強・おやつ・塾とプログラムが連続し準備片付け行為も多いが、プログラム転換時に児童の遊びの場を各領域に誘導しているため、遊びと準備始末行為の同一領域での重複は回避されている。

正午になると職員はキッチンでお茶の準備を、児童は弁当の準備を行い昼食となる(b)。プールの日は施設で事前に着替えが行われるが、全員が昼食を終えた後職員と児童と一緒に準備を行うため、昼食と着替えが同一領域で重複する事はない。プールの日は自由遊びとなり職員が昼食の片付けを行うが、片付け後は多目的室も遊びの場となる。午後のおやつ時には机配置は昼食時のままで、職員は簡単な準備を行うのみで他領域への児童の誘導はない。おやつ片付け時には児童はプレイルーム・畳コーナーで遊ぶ。掃除は全員で行い、その後は自由遊びとなる。

以上、本施設は連続する2室が確保されているため、児童の遊びと職員の準備始末行為、児童の静的遊びと動的遊びが重複することではなく、職員が準備始末行為を行う際児童の遊びは他の2領域で行われる。特に地域塾の日の午前中は職員の準備始末行為が多いものの、先行的準備行為により児童の遊びとの重複が回避されている。また職員の誘導により静的・動的遊びの場も明確に領域区分が行われている。夏休み期間中に地域塾が23日開催されるが、職員の準備始末行為と児童の遊びが円滑に遂行可能な空間構成は、長期の終日保育を運営する上で有効といえる。

表3 自由遊び合計時間と単位遊び合計回数

	記号	時間帯	地域塾・自由遊び					自由遊び・自由遊び				
			7/25	8/18	8/24	8/29	平均	8/12	8/17	8/30	8/31	平均
自由遊び 継続時間の 合計(分)	E(ti)	午前	82.1	84.4	73.3	82.1	80.5	143.2	145.7	153.8	166.3	152.3
		午後	205.6	249.4	245.6	225.0	231.4	291.1	236.4	210.0	253.8	247.8
単位遊びの 合計 回数(回)	E(pi)	午前	3.8	4.2	3.7	3.9	3.9	9.2	7.6	8.6	9.1	8.6
		午後	3.6	4.3	4.5	4.1	4.1	9.4	11.2	9.5	9.3	9.9
児童数(人)	n	終日	12	14	13	14	13.3	10	10	13	12	11.2

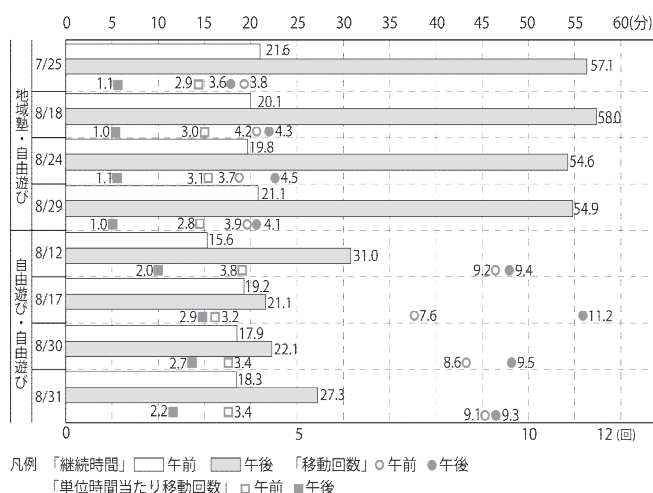


図8 自由遊びの継続時間と場の移動回数

6. 地域塾開催が児童の1日の自由遊びに及ぼす影響

終日保育における塾開催がもたらす児童の1日の生活行動への影響を検討するため、「地域塾・自由遊び」と「自由遊び・自由遊び」の各4日間を対象に^{注3)}、行動の制約がなく児童の心理状態が直接反映される自由遊びの時間を取上げ、(1)単位遊び^{注4)}継続時間(2)遊びの場の移動回数(3)遊びの種類と同一遊び反復回数を指標に行動比較を行なう。ここで単位遊び継続時間とは1種類の遊びへの集中度の継続性、遊びの場の移動回数は施設内での児童の遊びの場の安定性、同一遊び反復回数は1日の遊びの種類のも多様性の評価指標である。本論では新たに設定したこれらの指標値の相対比較により、塾開催による自由遊び行動への影響を把握する。

6.1 自由遊びの継続時間と移動回数

自由遊びの継続時間と移動回数を以下の方法により算定する。1人の児童の平均継続時間(Ti)は式(1)より求められる。

$$Ti = ti / pi \dots \dots \dots (1)$$

ti : 児童iの1日の自由遊び合計時間
pi : 児童iの1日の単位遊びの合計回数

式(1)より全児童の平均継続時間(K)は式(2)で求められる。

$$K = \sum Ti / n \dots \dots \dots (2)$$

n : 対象日の児童数

次に遊びの場の1日及び1時間当たり全児童平均移動回数(Md), (Mh)は式(3), (4)より求める。

$$Md = \sum mi / n \dots \dots \dots (3)$$

mi : 児童iの1日の自由遊び時間内の合計移動回数

$$Mh = \sum (mi / ti) / n \dots \dots \dots (4)$$

児童1人当りの自由遊び合計時間(ti)と単位遊びの合計回数(pi)

表4 遊びの種類別単位遊び時間と同一遊びの反復回数

時間帯	分類	遊びの種類									
		動的遊び					静的遊び				
		追いかけっこ	ボール遊び	ごっこ遊び	外遊び	レゴ	ビデオ	お喋り	塗り絵 折り紙	工作	読書
午前	(a)	13.2 2.5 0.7				18.6 6.8 1.8	26.1 4.3 0.4	23.4 3.3 0.9		20.0 1.0 1.0	
	(b)	10.0 4.7 0.2	14.8 2.7 0.3	15.6 7.0 1.4	33.4 4.5 0.0	20.5 6.3 1.9	22.9 8.0 1.8	30.6 2.0 1.3		6.5 6.0 1.3	45.0 2.0 0.0
午後	(a)	39.9 4.0 0.4	20.4 6.0 0.9	37.8 4.5 0.2	25.0 4.0 0.0	63.2 4.1 0.3	40.2 7.3 1.1	143.9 2.3 0.1		37.5 2.0 0.0	50.0 3.0 0.5
	(b)	15.8 6.3 2.1	15.6 4.7 0.3	25.8 1.6 1.6	29.6 5.3 0.1	27.2 6.5 0.8	25.2 7.5 1.3	31.9 1.7 0.8	42.9 5.5 0.0	15.3 8.0 1.0	20.0 2.0 0.0
終日	(a)	0.9	0.9	0.2	0.0	2.4	1.2	1.2	0.0	1.0	0.5
	(b)	2.1	0.5	1.7	0.1	2.0	2.0	0.9	0.0	1.2	0.0

注釈 1)分類(a)は、「地域塾・自由遊び」の日(7/25/8/18/24/29)の平均値、2)分類(b)は、「自由遊び・自由遊び」の日(8/12/17/8/30/8/31)の平均値、3)数値、上段は単位遊び時間[分]、中段は遊びを行った児童数[人]、下段は同一遊びの反復回数(行われた遊びの回数÷人数)を表す、4)終日の数値は、同一遊びの反復回数を表す。

の平均値を表3に示す。塾の日の午前中の自由遊びは80分程度、単位遊び回数は4回程度であるが、自由遊びの日は150分程度と長く、単位遊び回数も平均8.6回と多くなる。午後の自由遊び合計時間は塾開催日が平均231分、塾のない日が248分と大差ないが、単位遊び回数は塾の日は平均4.1回、塾のない日は9.9回と2倍以上の差が生じており、地域塾の開催が午後の自由遊び時間における単位遊びの回数に影響をもたらしている。

次に午前・午後に区分した全児童の単位遊び平均継続時間(K)と平均移動回数(M)を図8に示す。午前中の単位遊び平均継続時間は塾がない日が16-19分(平均18.8分)、塾開催日が20-22分(平均20.7分)程度で、塾の日のほうが若干分散しかつ継続時間の長い日が2日あるものの大差は見られない。これに対し、午後の継続時間は塾がない日が平均21-31分(平均25.4分)程度で午前とほぼ同様なのに対し、塾開催日は55-58分(平均56.2分)の範囲の値をとり、4日間とも50分を上回り午前中の2倍以上と長く、午後の単位遊びの継続時間には統計的にも明瞭な有意差(t検定:t=12.51,df=3.76, p<0.01)が認められる。

移動回数は単位遊びの継続時間と反比例の関係にあり、午前の移動回数(Md)は、塾開催日が3.7-4.2回、自由遊びの時間が約2倍多い塾がない日が7.6-9.1回であり、単位時間当たり平均移動回数(Mh)は各々2.8-3.1回、3.2-3.8回で、多少塾がない日の移動回数が多いものの大差は見られない。これに対し午後の自由遊びでは、塾開催日が3.6-4.5回、塾がない日が9.3-11.2回で、単位時間当たり平均移動回数(Mh)は各々1.0-1.1回、2.0-2.9回と2-3倍程度の差が生じており、午前中よりも相対的に移動回数は少ないものの、塾開催日と比較すると終日自由遊びの日の午後の移動回数が格段に多い点の特徴として指摘される。

6.2 遊びの種類別単位遊び時間と同一遊びの反復回数

次に遊びの種類別の単位遊び時間と同一遊びの反復回数を表4に示す。塾開催日午前中は自由遊びの時間が地域塾前後にまたがるため、動的遊びは少なくビデオ(26分)・お喋り(23分)・レゴ(19分)等の静的遊びが多いが、塾がない日の午前中は静的遊びに加えごっこ遊び・外遊び・追いかけっこ等の動的遊びが多い。

塾開催日午後は自由遊びの時間が12:30-15:00と15:30-17:00頃と連続しており、お喋り(144分)・レゴ(63分)・ビデオ(40分)の継続時間が午前中よりも相当長く、午前中には見られない読書(50分)

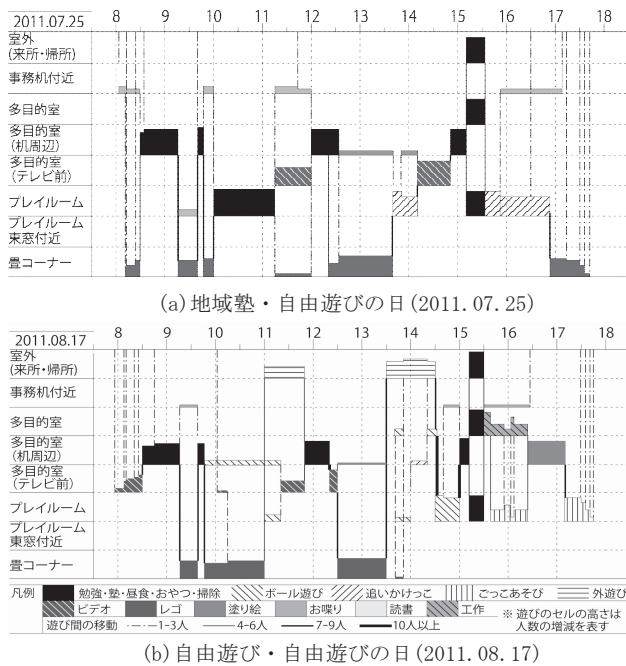


図9 遊びの種類と場所・時間

が行われている。また追いかけてっこ(40分)・ごっこ遊び(38分)・ボール遊び(20分)等の動的遊びも行われ継続時間も比較的長い。塾がない日の午後は午前中同様お喋り(32分)・レゴ(27分)・ビデオ(25分)・読書(20分)等の静的遊びが行われるが、継続時間は塾開催日と比較すると相対的に短い。動的遊びは全体的には午前中よりは継続時間が長くなる傾向が見られるが、塾開催日午後と比較すると、外遊びの継続時間(25, 30分)はやや長いものの、追いかけてっこ(40, 16分)・ごっこ遊び(39, 26分)・ボール遊び(20, 16分)とも継続時間は短い。

1日の同一遊びの反復回数はレゴ遊びが塾開催日・非開催日ともに2.0回以上と多いが、塾がない日は塾開催日と比較すると、自由遊び時間に差はあるものの、この他にも追いかけてっこ(2.1回)、ごっこ遊び(1.7回)の動的遊びとビデオ(2.0回)の反復回数が多いのが特徴である。午前中と比較すると午後は特に追いかけてっこ(0.2, 2.1回)とビデオ(0.8, 1.3回)の反復回数が増加し、反面静的遊びのレゴの継続時間と反復回数(1.5, 0.8回)が減少しており、追いかけてっこ・ごっこ遊び・ビデオ視聴が繰返されていることを示す。

6.3 遊びの種類と場所・時間の関係

遊びの種類と場所・時間の典型事例を図9に示す。地域塾・自由遊びの日は午前中に塾が行われるため、自由遊びの種類はお喋り・ビデオ・レゴと全て静的遊びで、常にレゴ遊びをする児童が5人前後見られ、お喋りは主に事務机付近で職員も交え行われる。午後はお喋り・ビデオ・レゴ等の静的な遊びに加え、ボール遊び・ごっこ遊び等の動的遊びがプレイルームで行われ、児童も10人前後と大半の児童が参加し、単位遊び継続時間も最長90分程度と長い。

終日自由遊びの日は午前のおやつ後昼食まで自由遊びで、お喋り・ビデオ・レゴ遊びや追いかけてっこ・外遊び等が見られ、特にレゴ遊びを行う児童が8-9人と多い。午後の自由時間になると静的遊びが始まり、レゴ・塗り絵は1時間程度継続している。その後追いかけてっこ・ボール遊び・外遊び・ごっこ遊び等に移行する。動的遊びはプレイルームと机が配置されている多目的室で行われ、追いかけてっこ・外遊

び・ボール遊び・工作等の遊びが並行し、大半の児童と一緒に遊ぶ塾開催日に比べ1-3人で頻りに遊びの種類と場を変更している。また午前・午後とも自由遊びの時間帯の終わり頃にレゴ遊びをしていた児童が外遊びへ移動している。

以上、塾開催日の午後の自由遊びは静的・動的遊びとも単位遊びの継続時間が長く、遊びの場の移動回数や1日の同一遊びの反復回数は少ない。一方全日自由遊びの日は塾開催日と比較して午後の単位遊びの継続時間が短く、移動回数や同一遊びの反復回数も多いことから、午後の自由遊びの集中力継続性に有意差が認められた。

この要因として、第一に、塾開催日午前中はまとまった自由遊びの時間がなく静的遊びが多く、かつ塾での体験学習に1-2時間程度拘束されるため、午後に追いかけてっこ・ごっこ遊び・ボール遊び等の集団での動的遊びやレゴ・工作等の児童が主体的に行なえる継続時間の長い静的遊びが集中的に展開されること、第二に、塾では児童全員で同一の学習・作業を行うため、集団行動の意識が高まっており、この点も午後の継続時間の長い集団遊びを誘発しているものと推察される。第三に、終日自由遊びの日は全員で行動する勉強・おやつ・昼食・掃除以外は全て自由遊びで、学校登校時や放課後保育時と比較して自由遊びの時間が大幅に長い。午前中はレゴ・ビデオ視聴・工作等の静的遊びを中心に児童個人の興味の高い遊びから優先して始められるが、2時間半程の連続した時間があるため遊びの種類を変えて過ごすものの、午後になると追いかけてっこ・ごっこ遊びやビデオ視聴等の反復遊びが増加するため、集中力の低下により相対的に継続時間が短くなる結果をもたらしているものと推察される。

7. 結論

7.1 得られた知見

本論では、終日児童保育の運営と生活プログラムのあり方に関し、塾を開催する2室3領域型の民家活用施設を対象に、夏休み期間中の使われ方調査を行い、以下の知見を得た。

- 1) 塾は午前中の1時間程度であるが、地域ボランティアを講師に招き様々なテーマで開催され、終日施設で夏休みを過ごす児童にとって、自由遊びに替わる体験学習プログラムとして様々な体験が出来る機会となっている。プレイルームは十数人の児童が塾の諸活動を行うのに十分な広さを有しており、単位空間の広い農家住宅納屋を活用した小規模施設の有用性が認められる。
- 2) 職員の準備始末行為が児童の遊びと重複しないよう、プログラムに応じ多目的室とプレイルーム・畳コーナーが逃げの場として機能し、場面転換の多い午前中も円滑にプログラムが遂行されている。特に塾では収納から机を取出し配置するケースが多いが、多目的室で午前のおやつ時間を設け、この間に職員がプレイルームで机を設置する等円滑な準備が行えている。遊びの種類も動的・静的遊びが各領域で区別され児童の異なる遊びの場の重複が回避されていることから、2室3領域型の空間構成がプログラム展開における逃げの場の確保と遊びの種類による場の選択にもたらす効果が確認された。
- 3) 午前中の塾開催により児童の自由遊びの形態に差異が認められた。午前中は塾開催日の自由遊びの時間が分割されるため静的遊びが中心で、塾がない日は静的遊びに加え動的遊びが多く見られるが、単位遊び継続時間と遊びの場の移動回数に大差は見られな

い。これに対し午後は、塾がない日の単位遊び継続時間は午前よりやや長くなる程度であるが、塾開催日は静的遊びの継続時間が大幅に長く、移動回数・同一遊びの反復回数ともに減少しており、塾開催の影響が顕著に認められた。

7.2 考察

夏休み期間中の終日学童保育における生活プログラムは、児童全員で行う勉強・午前のおやつ・昼食・午後のおやつ・掃除と、自由遊び、午前中の地域ボランティアを講師とする塾、午後の水泳(プール)及び終日の野外塾の組み合わせにより構成される。施設開設日 32 日の内、地域塾と野外塾の開催日数は計 23 日に及び、夏休みの主要な体験学習プログラムとして位置付けられている。塾のテーマは多彩で学校教育では体験できない内容も多く含まれる。さらに午前中の塾開催により午後の児童の単位遊び継続時間が長くなり、自由遊びの集中度が高まる間接的効果も認められた。

従って、終日学童保育における生活プログラムのあり方に関しては、本論で示した塾・水泳(プール)や野外塾以外にも地域の状況に応じた企画が想定される他、午前午後の体験学習・自由遊びの組み合わせも、各施設の運営方針に基づくプログラム編成の工夫があり得るが、終日自由遊びのみでなく一定のまとまった時間を確保した夏休みに相応しい学習プログラムを導入する意義は大きいものと考えられる。

終日保育を含めた施設空間のあり方に関しては、2室3領域型の空間構成は静的あるいは動的な遊びの場を領域として設定可能なため、本事例でも多目的室・畳コーナーが学習や静的遊びの場、プレイルームが塾や動的遊びの場として機能しており、夏休み期間中の多彩な内容の塾も円滑に遂行されている。またこの空間構成は、塾を含む1日のプログラム転換時に必要となる準備始末行為を円滑に遂行するための児童の逃げの場として、各領域が有効に機能することが確認されたことから、民家等の既存建築を小規模な学童保育施設として活用する場合には、施設定員に対応した一定の規模を有し、かつ改修を含め連続する2室が確保可能な建築を選定することが、終日保育を前提とした施設整備の前提条件として位置付けられる。

尚、本論では施設有効面積 60.9 m²に対し児童数 10-15 名の事例の使われ方を対象としており、定員 25 名の場合の使われ方及び両者の比較に関しては稿を改めて報告する予定である。

謝辞

本研究の遂行に当たり、下関市社会福祉協議会菊川支所、「つばめの家」施設長・職員及び児童保護者の方々の御理解と調査への全面的な協力を頂いた。末尾ながら記して謝意を表します。尚、本研究は日本学術振興会科学研究費(22560613)の助成を受けたものである。

注

注 1) 「中村さん家」のデイスサービス及び学童保育の取組みの経緯と「つばめの家」の改修プロセスの詳細は文 11, 12) を参照されたい。

注 2) お話系の「原爆のお話」では地図で大戦時の説明を行い、原爆や広島の様子を絵本で語る。「絵本の読み聞かせ」では間違い探し・ミニゲーム後、講師は近くまで児童を集め絵本を読み聞かせる。工作系の「万華鏡作り(1)」では画用紙に模様を書き、「万華鏡作り(2)」では銀紙を巻いた筒とビーズ等で万華鏡を作る。「しおり作り」では絵や色紙で国体応援用しおりを作る。「折り紙工作」では折り紙・画用紙で森や宇宙を表現し、「水族館作り」ではペットボトルに水やビーズ等を入れ水族館を作る。「誕生会ケーキ作り」では8月が誕生日の児童のため皆でケーキを作り午後のおやつに食べる。

勉強系の「消火訓練」では放水訓練、消防・救急車を見学する。「習字」で清書した課題作品は学校のコンクールに出品する。「英語に親しむ」ではミニゲーム・歌で英語を勉強する。音楽系の「歌とダンス」ではウクレレ演奏に合わせ歌唱とダンスが行われる。「菊華太鼓」では和太鼓の練習とお手本の演奏を聴く。「音楽に親しむ」ではリコーダー・横笛・ギターに合わせ歌唱する。運動系の「人間知恵の輪」ではグループでミニゲーム・知恵の輪が、「空手」では発声と型の練習が行われる。

野外塾では施設を離れ屋外で活動する。2010年より夏休み中2回歌野川上流の谷あい位置する古民家改修施設「歌野清流庵」を訪れ(図1)、住民組織「歌野の自然にふれあう会」の指導により物作りや遊びを行う。2011年は下駄・竹馬作り・川遊びが行われた。7月の野外塾の概要を付図1に示す。午前中は庭にシートを敷き竹と紐で下駄作り、昼食後は川遊びが行われた。



付図1 野外塾の事例(2011.07.28)

注 3) 「自由遊び・自由遊び」の日は全4日間、「地域塾・自由遊び」の日は全13日間の内、期日が偏らないよう7月から8月末の期間から任意に抽出した。

注 4) 単位遊びは、自由時間に行なわれる児童の多様な遊びの内、「1種類の遊びが同じ場所で一定時間継続する遊び」と定義する。

参考文献

- 1) 斎藤直子・長谷夏哉:都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心-豊かな空間確保両立についての考察,日本建築学会計画系論文集, No. 614, pp. 33-39, 2007, 4
- 2) 宮本文人・岩渕千恵子:学童保育施設における活動機能と平面構成,日本建築学会計画系論文集, No. 618, pp. 25-31, 2007, 8
- 3) 清水肇・小野尋子:学童保育施設の生活空間構成の実態,日本建築学会計画系論文集, No. 668, pp. 1799-1806, 2011, 10
- 4) 塚田由佳里・小伊藤亜希子:施設空間と保育方法からみた学童保育所の分割方法とその効果,日本建築学会技術報告集, 第27号, pp. 223-228, 2008, 6
- 5) 松本歩子・山根さおり・関川千尋:近年の学童保育所のあり方に関する研究,日本建築学会計画系論文集, No. 630, pp. 1683-1690, 2008, 8
- 6) 三宅勝司・高橋博久:民家型学童保育施設の空間構成に関する調査研究,日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1 分冊, pp. 59-60, 1997, 9
- 7) 江川紀美子・定行まり子:東京都心部の子育て関連施設の整備と計画に関する研究,日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1 分冊, pp. 17-18, 2009, 8
- 8) 山崎陽菜・定行まり子:夏休みにおける学童保育所の生活実態と人数規模による行為の分類,日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1 分冊, pp. 161-162, 2011, 7
- 9) 山崎陽菜・定行まり子:こどもの行為からみた学童保育所の空間のつかわれ方,日本建築学会技術報告集, 第39号, pp. 657-662, 2012, 6
- 10) 後谷一機・中園真人他2名:地域人材を活用した夏休み地域塾の取り組み,日本建築学会中国支部研究報告集, 第34巻, pp. 565-568, 2012, 3
- 11) 中園真人・山本幸子:農家住宅を再利用した地域共生ホーム「中村さん家」の使われ方,日本建築学会計画系論文集, 第75巻 第651号, pp. 1199-1207, 2010, 05
- 12) 中園真人・山本幸子他2名:農家住宅納屋の学童保育施設への再生プロセス,日本建築学会計画系論文集, No. 658, pp. 2925-2932, 2010, 12

(2013年4月9日原稿受理, 2014年1月10日採用決定)